

---

# **孤独な僕に舞い降りた孤独な神様**

HERON

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

孤独な僕に舞い降りた孤独な神様

### 【著者名】

HERON

### 【あらすじ】

これは、彼の昔々のお話です。そう。孤独だったあの頃の……

これは、彼の昔々のお話です。そう。孤独だったあの頃の……

彼が幼い頃、彼はとても幸せでした。自分の成長を喜ぶ家族がいて、一緒に遊ぶ友達がいて。

夜になると、ホカホカでおいしいご飯があつて、寝るためのベッドがありました……

しかし、幸せなんてそういう長く続くものではありません。彼の母が病死したことにより、幸せの歯車はあらぬ方向へ向きを変え、狂い始めてしまいました。

あんなに優しくて頼りがいのある父が、酒に溺れ、自分に暴力を振るい、あげくの果てには自分を捨てたのです。

彼が父に捨てられた事実は瞬く間に町に広がり、彼と一緒に遊んでいた友達も、もう、彼に近寄ろうともしません。

彼はもう、一人です。自分の成長を喜ぶ家族もいません。一緒に遊び友達もいません。

夜になつても、ホカホカでおいしいご飯も、寝るためのベッドもありません。

もう、あのときのような幸せは崩れ去ったのです。

それでも彼は、孤独な中、生き続けました。もう何年過ぎたかも分かりません。服だつてもうボロボロです。

そんな彼の日課は、毎晩毎晩、色々な人の家の中を窓の外から見続けることです。

窓の外からいくら色々な人の家の中を見たって、窓を開けてくれる人なんて一人もいません。

そんなことは彼にも分かっていました。しかし、信じたかったのです。羨ましかったのです。自分もいつか、窓の先のような幸せを取り戻せると……信じたかつたのです……

そんな毎日を送る彼。もう、あのときのよつたな幸せは訪れないのでしょうか。

「いいえ。そんなことはありません。孤独に耐え、何年もの間、幸せを願い続けてきた彼に幸せが訪れないはずがない。

そう。人生の転機は突然やつてくる。何の予兆もなく、突然に……

「孤独は寂しいか？　もし、私のような得体の知れないものが突然、お前の前に現れても、お前は喜ぶか？」

彼の頭の中に響く声。彼は驚き、後ろをパッと振り向いた先には、見たこともない……正に得体の知れないものが彼の瞳に映りこみました。

彼の瞳に映りこんだその得体の知れないもの。なんといえばいいんでしょう。

透明な何かに白い布を被せたようなその姿。目と口は、大雑把に目と口の形に布が切られているので、かるうじて分かります。

「うん。喜ぶよ。とっても嬉しい」

彼が得体の知れないものを見て、笑顔でそう言葉を返す。得体の知れないものは、彼の反応に驚いた様子。

「お前……私を見て、恐怖を感じないのか？こんな生物みたことないだろ？なぜ、私に笑顔で接する？私は今までこの姿を見て逃げていった人間を沢山見てきたというのに……」

「恐怖なんて一つも感じないよ。だって、僕に話しかけてくれる人なんていなかつたんだもの。久しぶりに言葉を口に出せて、とても嬉しいんだ。むしろ、もつと沢山、お話したいなあ……なんて」

どうでしょう。彼は怖がるどころか、逆にもつと話がしたいと、得体の知れないものに頼みました。

得体の知れないものは更に驚きます。これは今までにはないケースだったのですから。

「わ……私も、お前ともつと話をしたい。わ……私と、その友達になつてはもらえないだろ？」「

「こんな僕でいいの？僕と友達になつてくれるの？本当にいいの？嬉しい。凄く嬉しい！僕、グリュつていうんだ。あなたはなんて名前なの？」

グリュのテンションは最高潮です。

それもそのはず。何年もこの光景を信じ続けてきたのですから。ちなみに、得体の知れないものは、町歩く人々には姿が見えていません。なので、町歩く人々は、突然、大声を上げたグリュに目がいきます。人の瞳にクッキリとグリュの姿が映るのも、久しぶりのことです。

「私の名前は……私の名前……実はないんだ。私は孤独の神様でな。孤独に生きる人に幸せや勇気を与えるのが仕事のはずだったんだが、見ての通りこの姿だ。みんな逃げていってしまう。始めは仕事とし

て幸せや勇気を与えようとしていたよ。でも、次第に私自身も孤独になってしまった。今では、仕事としてではなく、本気で誰かと友達になりたいのだ。そして、勇気を与え、私も勇気をもらいたかった。そんなときに現てくれたのがグリュだ。グリュはグリュといういい名前をもっている。しかし、私には名前もない……」

「あるよ神様。神様つていうい名前があるじゃない。神様は僕に勇気をくれたよ。誰がなんといおうと、神様は僕の神様だ。なんだかじじや じじやになっちゃうけど、神様は僕の神様なんだ！」

いつして、孤独の神様には神様という名前が名づけられました。

もう、グリュは孤独じやない。神様だつて孤独じやない。グリュと神様はもう友達です。苦しみを喜びを感動を分かち合える友達なのです。

ほら、もう歩きながら喋っています。グリュの人生。神様の人生。それぞれの人生を話し合える仲なのです。

今日も、明日も、明後日も、一人は話し続けます。グリュが孤独な人生の中で見つけてきた秘密の場所だつて教えてあげます。神様も嬉しそうにグリュの話を聞き、秘密の場所に驚きます。

ようやくです。どれくらい過ぎたか分からない年月をかけて、あらぬ方向へ向きを変え、狂っていた幸せの歯車が、ようやく正常に動き始めました。

一人は今日も、グリュが見つけた秘密の場所で夕食の調達。

そこは人気の無さそうな森で、木に生っている果物は、誰の手にも触れられることなく無数に生っています。正に、グリュだけの果物。秘密の場所なのです。

木に生っている果物を取り、おいしそうに食べるグリュ。それを見つめる神様。

ジッと果物を見つめている神様に気づいたグリュ。「食べてみる？」と一つ果物を神様に差し出しました。

しかし、神様は果物を食べることは出来ないので「私は神様なので食べることは出来ない」と断りました。そして、ハハハと笑いました。

そんな他愛もない会話がとても楽しいのです。今まで孤独に生きてきたグリュと神様にとつては、他の誰よりも楽しいのです。

しかし、人生は残酷なもの。一度狂った歯車は一度だつて狂います。

なんと、森が何者かの手によつて燃やされ、森が炎で包まれました。

急いでその場から逃げるグリュと神様。幸い、それ程、森の深いところまで足を進めていなかつたので、十分逃げ切れると思いました。しかし、アクシデントは続きます。

なんと、グリュと神様の瞳に、炎に包まれた森で倒れている少女の姿が映つたのです。

グリュと神様は、一瞬、少女を助けるべきかどうか悩みました。しかし、それは一瞬のこと。グリュと神様は、アイコンタクトをとるように目を合わせると、一目散に少女の下へ走りました。

炎の中をかいくぐり、倒れている少女を抱え、また、森の外へと走り出すグリュと神様。

体も顔も黒焦げになり、ボロボロだった服も更にボロボロに。

しかし、グリュと神様と少女は生き延びました。そして、メラメラと燃える秘密の場所を見て、涙をこぼしました。

しばらくして、目を覚ました少女。すぐに、燃え盛る炎の中から助けてもらつたんだと察知し、グリュにお礼をいいました。

その後、グリュは「ちゃんとしたお礼がしたいので、家に来てください」と言われます。

グリュは答えに戸惑いました。しかし、神様が「行くべきだ」と言うので着いていくことに決めます。

少女に着いていったその先は、グリュが見たこともないような大きな家。

少女が家の前に立つと、ボディーガードらしき人物が少女の前に群がり、何かひそひそと話をしています。

しばらくして、グリュの前に帰ってきた少女が、笑顔で「入つて」と言いました。

中に入ると、少女の母らしき人物が現れ、グリュに何度も何度もお礼をいいます。

グリュも照れながら応対していると、少女がビッククリするような発言をします。

「お母様。私、この人と一緒に暮らしたい。この人とこの家で一緒に住みたい」

これには、グリュも、少女の母も、神様だって驚きました。

しかし、これはグリュの幸せでもあります。新しい家族が出来るのです。成長を喜んでくれる家族ができます。ホカホカなご飯も寝るためのベッドもあることでしょう。グリュにとつて幸せの訪れと

いつても過言ではありません。

しかし、それは孤独だった頃のグリュの話。今は、神様がいます。グリュは神様と一緒になら……という思いに変化しているのです。

「そ……それは、私にとつても願つてもないことだけど、この方にも家族がいらっしゃるのよ。無理を言つてはいけません!」

少女の母が少女を叱り付けます。しかし、少女の母は氣づきました。家族という言葉を自分が発言したとき、グリュの顔が落ち込んでいたことを。家族がないということを……

「あつ……もしよかつたら、ここで一緒に暮らしてもいいのよ。大歓迎だわ。ねえ。ベル?」

「うん! 私大歓迎。一緒に暮らそう? いいでしょ! ?」

ベルの母の許しをもらつたベルが元気よくグリュに尋ねます。  
しかし、グリュは迷つてしまつのです。この家に住むことにより、神様と話す時間がなくなってしまうのではないかと。

「神様もいいかな? 実はね。僕の隣に神様っていう神様がいるんだ。とても話しゃべくて楽しいんだ。僕にとっての神様なんだ神様は。いいでしょ?」

とうとう、グリュの頭は混乱を極めました。もう、自分が何を言つているのか分からぬ。

ベルもベルの母も、煙を吸いすぎたんだと、大慌てでグリュをベッドに運ぶ準備を始めます。

それでも、グリュは神様の話を話し続けました。頭が混乱しても、グリュは神様のことだけは、はっきりと覚えている。

しかし、これではグリュが変人として扱われ、ベルとベルの母に気味悪がられるかもしない。もしかすると、やつと掴んだ幸せが一瞬にして崩れ去ってしまうかもしない。

神様はそう思いました。神様の事を最も心配しているのがグリュのように、グリュの事を最も心配しているのは神様なのです。

神様は覚悟を決めて決心しました。神様には勇氣があります。グリュにもらった勇氣があるのです。振り絞るような声でグリュの耳元で囁きます。

「ありがとうグリュ。グリュのお陰で私は孤独ではなくなった。勇気だつて楽しさだつて何だつてもらつた。私は幸せになれたんだ。でも、私のせいでグリュの幸せが崩れてしまつ。それは駄目なことだ。だから、私は孤独に戻るよ。だつて、私は孤独の神様だからね。孤独な人をもつと幸せにしないといけない。だから、グリュは私のことを忘れるんだ。そして、この家で幸せな生活を送るんだ。じゃあ、私はそろそろ行く事にするよ。グリュと過ごした生活。最高に幸せだった。ありがとう。そしてさようなら」

神様は、そう言った後、グリュに呪文を唱えました。

それは、グリュが自分の全ての記憶を忘れる呪文。

神様が呪文を唱え終わると、グリュは気を失いました。

しばらくして、目を覚ますグリュ。しかし、目を覚ましたグリュには、神様と過ごした全ての時間の記憶がありません。もう、グリュの記憶から神様は消え去了のです。

グリュはその後、ベルと結婚し、幸せな生活を送っています。

神様はといふと、今も孤独の神様として、孤独に生きる人に幸せや勇気を与えると頑張っています。しかし、グリュのような人はおらず、みんな神様の姿を見て逃げてしまいます。

でも、神様はへこたれません。神様はこんなとき、グリュの姿を思い出すのです。

グリュのように自分を見ても好意に接してくれる人は存在する。

そう信じて今日も、孤独に生きる人に幸せや勇気を与えると頑張っているのです。

(後書き)

久しぶりの短編です。

一月に書いた前の短編よりもスラスラと、そして、納得するものが書けました。半年つて凄いですね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5654e/>

---

孤独な僕に舞い降りた孤独な神様

2010年12月5日14時42分発行